

看護教育における人間関係トレーニング

— コロナ禍での挑戦 —

寺沢英理子^{※1} 増戸紀子^{※2} 藤瀬竜子^{※3} 大野裕美^{※4} 藤原唯^{※5}

Human relations training applied to nursing education
A challenge under restrictions caused by the spread of COVID-19

Eriko Terasawa, Noriko Masudo, Ryuko Fujise, Hiromi ONO, Yui Fujihara

【要 約】

看護教育の一環としてエンカウンター・グループを中核とした人間関係トレーニングを行うことの有益性・重要性は、既に多くの研究や実践で明らかになっている。本論文では、ある看護学校における、執筆者たちがファシリテーターを務めた人間関係トレーニングの詳細を紹介し、コロナ禍で合宿訓練を行えないという悪条件の下で、いかにしてトレーニングの実効性を確保したかを述べる。併せて、現在の環境下では、看護教育で人間関係トレーニングを行うことが難しくなっている状況に触れつつ、人間関係トレーニングを行うことの意義について論じる。

キーワード：看護教育，人間関係トレーニング，ベーシック・エンカウンター・グループ，構造的エクササイズ

1. はじめに

本論文の執筆者の一人である寺沢は、大学院生の頃から30年以上にわたって、ある看護学校における人間関係トレーニングに関わってきた。当初は単なるアシスタントだったが、経験を積み重ねる中でファシリテーターの一員となり、オーガナイザーの引退後は、その役割も引き継ぐこととなった。本論文の執筆者は、全員このトレーニングにファシリテーターとして参加しており、そこでの経験は、私たちにとって貴重な財産となっている。

トレーニングは、初期の試行錯誤を経て、たくさんのプログラムが開発され、安定した水準が保たれるようになった。看護教育を取り巻く環境の変化により、トレーニング内容に大

※1 神奈川大学大学院 人間科学研究科 非常勤講師
※2 市ヶ谷カウンセリングセンター
※3 新潟青陵大学 福祉心理子ども学部 子ども発達学科
※4 医療法人白百合会 大多喜病院
※5 田園調布学園中等部高等部 スクールカウンセラー

きな改変が生じたこともあったが、トレーニングの意義を喪失することなく長期間続けて来られたのは、学校関係者による本トレーニングへの高い評価と多大な支援の賜物であることは言うまでもない。

以下では、看護教育における人間関係トレーニングの位置づけや、看護教育を巡る環境変化に触れながら、私たちが実施した最新のトレーニングの内容を紹介し、本トレーニングの意義を改めて考察してみたい。

2. 看護教育における人間関係トレーニング

人間関係の訓練のためのグループ・プログラムが日本において初めて作られたのは、1950年代後半である。エンカウンター・グループは、ロジャーズのもとで学んだ畠瀬稔らによって1969年に導入され、人間関係研究会の活動等を通して広まっていった(滝沢(1997))。1970年代には、九州大学の村山正治、野島一彦などによってエンカウンター・グループの実践と研究が活発に行われた。

こうして日本に導入されたエンカウンター・グループは、看護学生の教育においても大いに活用されるようになった。田中ら(1980)は、看護専門学校において行われた人間関係トレーニングの効果を分析しながら、トレーニングのあり方、特にファシリテーターの課題を論じ、最後に「どういうST〔Sensitivity Training(感受性訓練)の略称、本論文で言う「人間関係トレーニング」に相当〕が本当に役立つかも、課題として残るところが多い。しかし、STを通してできることがあるのも事実である。大学のみならず、高等教育機関において、STが見直され、それなりの位置を占めつつあることはこうした観点から望ましいことといえよう」と結論付けている。

矢吹(2007)は、「看護等対人援助行動において、その援助を受ける対象者である人の行動を観察することからはじまり、その人の置かれている環境と、その中でその人への影響を理解することは重要である。また、その集団の中で、他者に対して、自分がどのような行動(感情表現・態度)をとる傾向があるかを知る自己理解は、看護基礎教育において必要不可欠である」と述べ、看護学生にとってグループ体験を行うことの意義と効果を詳細に検討している。

原田・岩崎(2007)は、「筆者は学生が自己理解を深めるためには、カウンセリングの考え方や方法を活用していくことが有効だと考える。その一つにエンカウンター・グループがあり、自己理解に影響を与えることはすでに多くの研究で明らかになっている」と述べ、看護学生の教育においてエンカウンター・グループが広く活用されていることを前提として、自己理解に影響を及ぼす要因の研究を行っている。

葉山(2015)は、高等学校の看護科で行った「人間関係論」の授業の実践報告を行っている。葉山の実践では多様なエクササイズも取り入れられており、まとめとして「授業のもたらした効果として『新たな気づき』『意識の変化』『能力の変化』と言う3つのカテゴリーが見出された」と述べている。

看護教育において、エンカウンター・グループを中核とした人間関係トレーニングが重視

されてきたのは、患者との対話において患者の気持ちを深く理解することが、看護師にとって重要かつ必須な能力だからである。また、医療チームのメンバーである看護師が多職種とスムーズに連携する上でも、お互いの真意を伝えあい受け止め合う能力は重要かつ必須である。そして、このような能力を高めていく手段として、人間関係トレーニングの導入は非常に有効なのである。

次章では、ある看護学校において私たちが行ってきた人間関係トレーニングについて、その変遷の過程も含めて紹介する。折しもコロナ禍に遭遇して、トレーニング内容も大きく変えざるを得なかったが、その中でどのような工夫を行ってトレーニングの水準を保とうとしたかについても、章を改めて詳述したい。

3. A 看護学校における人間関係トレーニングの変遷

3.1 1974年から1996年まで

A 看護学校では、1974年から人間関係トレーニングを導入している。トレーニングは「感受性訓練」と呼ばれ、この名称は2018年まで用いられた。導入時より外部から心理学の専門家が中心メンバーとして参画し、学校の教員との協力関係を築きながら、学生にとって有効性の高いプログラムを模索してきた。

エンカウンター・グループを行う上では、非日常性や出会いの一回性などの構造が重視されるが、看護学校の同じクラスの学生を対象に、看護教育の一環として行う場合、この構造を確保するには工夫が必要となる。そのため、同校では外部の旅館を借りて、そこでの合宿研修という形でトレーニングを導入した。また、参加する学生たちは、トレーニング後も一つのクラスとして学び続けていく人たちであり、卒業後も一定の関係が続くことを考慮して、本人の心の準備が追いついていない状態で話しすぎないように、場をコントロールすることがファシリテーターには求められていた。

トレーニングは1年生時と3年生時の2回で、いずれも2泊3日の合宿形式で行われた。A校からの要望は、1年生には楽しい合宿という体験をさせてほしいというものであった。そこで、1年生時のトレーニングプログラムでは構造的エクササイズをふんだんに取り入れ、一定の成果を目指すように工夫した。3年生時のトレーニングでは、ベーシックエンカウンターを中心としたプログラムを組んでおり、このトレーニングを経て、学生たちは卒業して行くのである。

この2段階のトレーニングはA校の関係者から高く評価され、1996年まで20年以上にわたって継続することができた。

3.2 1997年から2019年まで

1997年入学者からカリキュラムが変更され、それに伴ってトレーニングの実施方法が大きく変わった。在学中に合宿訓練を2回行うことが時間的に困難となったため、2年生時に1回だけトレーニングするスタイルに変更されたのである。

合宿訓練が1回になったことで、ベーシックエンカウンターの時間を出来るだけ生かせる

よう、構造的エクササイズでのグループ分けをベーシックエンカウンターของกลุ่ม分けと同一にした。また、ベーシックエンカウンターの中で促進的関わりが必要な場合、ファシリテーターの判断で即座に何らかの手が打てるよう、描画や粘土細工の道具等をふんだんに準備して臨むことにした。

トレーニングでファシリテーターを務める学外スタッフは、初期の1人から徐々に増え、1997年には5名となっていた。この体制なら、ベーシックエンカウンターの際に一人のファシリテーターが受け持つ学生は最大9人程度となり、1回だけのトレーニングであっても、密度の濃いグループ体験が提供できる。

学生たちの様子や訓練の進み具合に応じて、プログラム内容を臨機応変に変更できるよう準備していたことも相俟って、この期間の後半においては、3日間の合宿訓練というスタイルのトレーニングとしては高い完成度に達していたと考える。トレーニングの効果について、田中ら(2007)は「訓練の後、毎年副学校長とクラス担任と学生たちからそれぞれ礼状が届く。その多くは、学生やクラスのその後の様子を伝えながら、訓練の成果を認める内容となっている」「卒業後の受け入れ先から「貴校の卒業生は何かあったときに自分を振り返る力がついている」との評価を受けた当時の教務部長が、感受性訓練の影響が大きいとして、訓練の継続を決意したというエピソードもある」と述べ、「期間が短いにも関わらず感受性訓練の成果を上げることが出来た」と結論付けている。

本節の最後に、2004年に起きた非常事態にも触れておきたい。この年、トレーニング実施前日にA看護学校は大地震に見舞われた。校舎に被害が生じ、教職員や学生にも被災者が発生した。予定していたトレーニングは中止されたが、年度末に学校でトレーニングを実施することとなり、この年度のみ、2名のスタッフによる2日間の講義形式という異例のプログラムで対応している。

3.3 2020年から2022年まで

2020年、世界はコロナウイルスの猛威に見舞われ、A看護学校でも通常の授業や実習が行えなくなった。合宿形式の人間関係トレーニングも実施不可能となった。

このような中、年度末ぎりぎりに、学校を会場として2日間の日程でトレーニングを実施することが決まった。2004年の大地震以来の非常事態である。

急な日程変更で、2名のスタッフで対応することになったため、すべてのプログラムを講堂にて全員で行う形とした。その制約の下で、個人での作品制作から始めて、グループ制作と発表というように、個人とグループ、そしてクラス全体を意識しながらの体験の機会を盛り込む工夫を凝らした。学生たちも、不自由な中で果敢に取り組み、何かを得ようと頑張っていた。

この年の変則的な実施は、プログラムの検討に苦しんだだけではなかった。学生たちの日常生活の喪失は、教育や個人々のメンタルに大きな影を落としていた。ただ、実施が例年より半年近く遅かったためか、学生の成熟度は従来より上がっていた印象がある。時期に加えて、大きな苦難に立ち向かったことで成長が促進されたことも否めないであろう。

2021年と2022年は、2020年と同様に学校での2日間のトレーニングとなったが、スタッ

フはコロナ前の5名に戻り、時間は短縮されたものの、5つのグループに分かれてのセッションエンカウンター体験を組み込むことが出来た。

3.4 トレーニングの名称とカリキュラム上の位置づけ

3.1で述べた通り、このトレーニングは当初から長く「感受性訓練」と呼ばれてきた。1996年までは正規カリキュラム外のトレーニングだったが、看護教育の第3次カリキュラム改正を受けて、1997年に「精神看護学Ⅰ 感受性訓練」として正規のカリキュラムに組み込まれた。その後、第4次カリキュラム改正を受けて各科目の狙いが見直された結果、2018年に「精神看護援助論Ⅱ 人間関係トレーニング」に名称変更され、現在に至っている。

名称こそ変更されたが、学校がこのトレーニングに期待するものは一貫しており、学生が将来看護師となったときに必要とされる感受性の開発にあった。具体的には、自分自身に気づく、他者との関係性のなかでの自分に気づく、そして、他者との関係性のなかで自分らしく行動できるということである。

本論文では、その時々名称を用いると混乱を生じる恐れがあるので、「人間関係トレーニング」、あるいは、単に「トレーニング」と表記することにする。

4. コロナ禍での人間関係トレーニング

本章では、まずコロナ禍以前とコロナ禍以後の環境の違いを整理し、その上で2022年のトレーニングの概要を紹介する。コロナ禍前から変えた点、変えなかった点についても触れる。

4.1 コロナ禍がもたらしたトレーニング環境の差異

4.1.1 トレーニングの実施場所の違い

A看護学校では、このトレーニングを学外の旅館を借りて合宿形式で実施してきた。学校での実施は、大地震によって合宿が出来なくなった2004年以後のことである。

学校で行うということは、日常生活の場で非日常を作り出さなければならないことを意味する。学生たちは、休み時間には、いつもの教室でいつものように過ごすことができる。いつも通りに学校に来て、着替えをして、トレーニングに参加するという感覚になるだろう。学校でない場所で行うことで非日常が構造的に担保されていたトレーニングとは異なり、スタッフは意識的に非日常を作り出さなければならない。

日常との違いを作る上では、学外のスタッフが関わる点は大きい。ここには構造としての非日常性がある。さらに、非日常を作る工夫として、携帯電話を朝から帰宅時までA校の先生に預かって頂くことにした。これは、今の時代の学生たちにとって、かなり大きな非日常体験となった。昼休み、携帯電話のない空間では学生たちの明るい笑い声が響いていた。ゲームやおしゃべりに興じた体験を多くの学生が楽しい体験として語ったことは印象深い。

4.1.2 トレーニングの実施方法の違い

これまで合宿形式でトレーニングを行ってきたことを考えると、その日のプログラムが夕方終了し、学生たちが携帯電話を受け取って自宅に帰ることも、構造上の大きな違いである。われわれスタッフにとって、最も心配な点であった。1日目に積み重ねたトレーニングが日常にかき消されてしまう不安は大きく、学生たちにも「今の感覚、余韻をもったまま、明日の朝またお会いしましょうね」と、帰宅後に発散してしまわないように過ごすことを呼びかけた。

昼食に関しても大きな違いがあった。合宿の時は旅館で調理されたご飯を皆で食べていたのだが、週末に学校で行うので、アレルギー対応が難しいこともあり、各自が昼食を持参する形になった。一緒に食べることは可能だが、「同じ釜の飯」にはならない。ここにも日常の匂いが漂うことになる。

4.1.3 トレーニングの日数の違い

従来の2泊3日の合宿トレーニングでは、正味2日半の時間をかけており、さらに合宿ということもあって、濃密な時間を過ごす印象が強かった。夜は自由時間であるが、昼間のプログラムに刺激を受けた学生たちが自主セッションを行うこともまれではなかった。

一方、学校での実施では、週末の2日間しかトレーニングに当てられない。時間数が少ないため、訓練の濃密さは合宿時と同等以上が求められる。そのためには、構造的エクササイズセッションとベーシックエンカウンターセッションのつながりを、従来以上に工夫しなければならない。

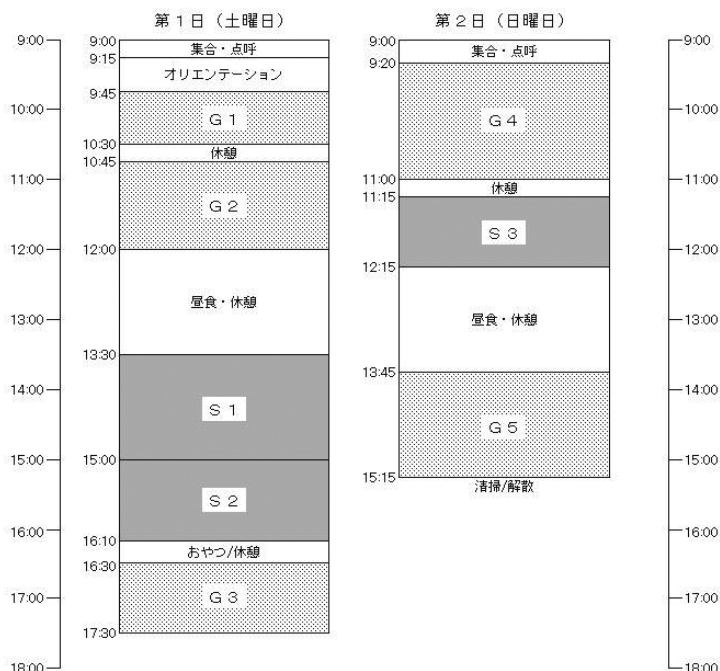


図1 プログラムの構成

2020年の訓練ではベーシックエンカウンターセッションを中止した。そこで、構造的エクササイズセッションのみでも例年に近い効果を提供できるよう、プログラム内容を工夫した。この時の試行が翌年度以降のプログラム改善に生かされ、2022年にはまずまずのプログラムを作ることができたと考えている。

4.2 トレーニングプログラムの構成

2022年のプログラムの構成を前頁の図1に示す。

このプログラムは、学校での2日間のトレーニングという条件の下で作り上げたものである。上述したさまざまな違いを考慮しつつ、できるだけ2泊3日の合宿研修に近い体験を提供するという方針の下で練り上げている。

図1で、G1～G5と記載しているのが構造的エクササイズセッション、S1～S3と記載しているのがスモールグループによるベーシックエンカウンターセッションである。A看護学校では、人間関係トレーニングの導入時から、ベーシックエンカウンターを基本とし、その展開を促進援助するために適宜構造的エクササイズを挟み込んできた。

今回のプログラムでもその点は変えていないが、合宿形式でなくなったため、1日分のプログラムをG→S→Gという構成にする必要があった。先行するGセッションでベーシックエンカウンターへの助走を行い、後続するGセッションで学生たちを日常の空間に戻すのである。

4.2.1 構造的エクササイズのセッション

例年、オリエンテーションや構造的エクササイズのセッションでは、セッション毎に担当するスタッフを決めていた。各スタッフは、自分が担当するセッションについて、セッションの進め方、学生に対する教示、各ステップの時間配分などを細かく記載した計画書を作成する。

トレーニングの1か月ほど前に、全スタッフが集まる事前ミーティングを行い、持ち寄った計画書を全員で検討し、セッションの意味や実施方法について共有するとともに、必要な手直しを行う。

トレーニング当日は、スタッフ全員が計画書を持ち、学生の全体的雰囲気なども確かめながら、担当者を中心に、スタッフ同士の連携も重視しながら進めていく。

このやり方は2022年のトレーニングでも全く変えなかった。このような準備と配慮が、短いトレーニングにおいて効果を最大限に引き出す際の大きな力になると実感していたからである。

4.2.2 ベーシックエンカウンターセッション

ベーシックエンカウンターセッション（Sセッション）では、クラスを5つのスモールグループに分け、スタッフが一人ずつ加わってファシリテーターの役割を担った。プログラム上の配置は以下の通りである。

S1・S2セッション：1日目 13:30～16:10

S3セッション : 2日目 11:15~12:15

S1・S2セッションは、各スモールグループの進捗状況に応じて、適当なところで2分割することになっている。間の時間には、A校の先生にお願いしておやつを用意してもらう。グループの流れによっては、おやつを挟んで雰囲気を変えることもあるし、休憩を取らずに続けて実施して、おやつは持ち帰りとすることもある。

スモールグループのメンバーの凝集性を高めるため、2日目の冒頭で行うG4セッションでは、ワークをSセッションのスモールグループごとに行った。また、Sセッションでは、それぞれのグループの進み具合に応じて、ファシリテーターの判断で非言語的表現を用いることにしており、そのために描画や粘土細工の道具を準備した。

これらの工夫は例年と同じである。

4.3 その他の工夫など

4.3.1 学生による振り返りの確認

各セッションの終わりには、学生たちに振り返りを書いてもらい、スタッフはそれを読んで学生の様子を把握し、必要な場合はスタッフ間で情報を共有する。これも例年行ってきたことであるが、2日間の日程になったことでセッション間の休み時間が短くなり、振り返りを読むのが困難になった。そこで、昼休みを1時間半に拡大し、そこで振り返りを読めるようにした。

4.3.2 スタッフの編成

本トレーニングのスタッフは毎年同じではなく、オーガナイザーが都度人選して依頼し、参集してもらう形である。2021年と2022年は、2019年に集まったスタッフを、たまたま変更なしで集めることができた。コロナ禍におけるトレーニングという難題に、同じ顔触れで取り組めたことは幸いであった。

4.3.3 スタッフミーティング

図1には記載していないが、スタッフのみで行うミーティングをプログラムの随所に組み込んでいる。プログラムの確認やSセッションの進捗状況の共有などを行う。時には、学生たちの様子に鑑み、プログラムの微調整などを行うこともある。

看護学校の先生方を交えての拡大スタッフミーティングも行っている。学生の様子の共有は大切にしているが、プログラム中の細かな様子は伝えていない。どうしても伝える必要がある場合には、慎重に行うことになる。また、前述した通り、セッションごとに学生に振り返りを記入してもらうが、その内容も伝えしないことにしている。

トレーニング終了後の振り返りの確認で心配な学生が見られた場合には、その旨を先生方にお伝えすることになる。振り返りの内容は先生方には見せないと学生たちに約束しているので、伝え方は工夫する。先生方もその点は十分に了解している。

これらも例年と変わっていない。

5. 2022年のトレーニングプログラムの詳細

今回のコロナ禍におけるトレーニングは、これまでのプログラム開発で得られた知恵を総動員するものであった。学校での2日間の研修という枠組みの下で一定の成果を上げたと考えられるので、オリエンテーション及び構造的エクササイズセッションについて、以下に詳細を紹介する。

前章で述べた通り、これらのセッションでは、担当するスタッフが事前に詳細な計画書を作っている。以下の記述は、計画書の記載を一部割愛して再構成したものである。なお、スタッフによる学生への教示は、セッションの意図を知る上で重要な部分であるが、紙幅の制限があるため、重要な部分以外は記載を簡略化ないし省略した。

5.1 オリエンテーション (1日目 9:15~9:45)

5.1.1 目的

人間関係トレーニングへのスムーズな導入とルールの確認、ルールの効用の共有（学生たちの人間関係トレーニングへの期待と不安も含めて扱う）。

入学後の特殊な状況への言及と慰労。この授業に関しても、いつもとは異なる方法になったことへの配慮を伝え、効果に関して同等のものを目指す旨を伝える。そのために、私たち皆が力を尽くしましょうというメッセージを送る。

5.1.2 進行

(1) スタッフの自己紹介

(2) コロナ禍を生きてきたことへの労いと訓練の形式変更についての説明

(3) 人間関係トレーニングの目的・目標の説明

トレーニングの目的・目標が以下の2つであることを説明する。

- ①自己の他者との関わり方に気づく
- ②他者との関係で自分の行動がとれる

普段の「自分や相手がわかる」という体験をさらに深め、「より本当の自分やより本当の相手に出会ってみよう」と呼びかける。

(4) トレーニングの目的・目標を達成するためのガイドラインの説明

【教示】

- ①ここではいつもよりしっかりと、そしてていねいに自分の気持ちや、心の動きに耳を傾けてみましょう。
- ②いつもは、明確な課題や評価に合わせて行動することが多いと思います。でも、この2日間は、急いで形にしたり、格好よくまとめたりする必要はなくて、まだ形になっていないようなものが自分の心の中にあることを確認したり、「今ここで、自分はどんな風を感じ

ているか」を味わったり、自由に表現したり、人にも伝えたりしてみる、そんな時間になりたいと思います。

- ③相手の気持ちにも耳を傾けて、それをしっかりと受け止めてみましょう。
- ④また、安心して自己表現できる場をみんなで作っていきたいと思います。リアクションがないということは、話をした人にとってはとても不安なものです。人の話を聞いて、何を感じたかを伝えながら、安心できる場を作っていきましょう。
- ⑤5つ目はスタッフの役割です。スタッフは、みなさん一人ひとりが目標を達成するためのお手伝いをするために一緒にいます。教えたり導いたりということではありません。皆さんが自分自身でやったこと、自分で手に入れた成果を持って帰ることになります。自分のペースで進めていきましょう。

(5) 日程に関する2日間のルールの説明

トレーニングのプログラムの説明に加え、スモールグループは2日間変更しないことや、振り返り用紙の内容はここにいるスタッフだけが読み、学校の先生方には秘密が守られることを伝える。

トレーニングの成果を上げるために、お昼休みも外出はしないことや、家に帰って過ごす時間も、1日目に進めてきた心の作業が散ってしまわないように過ごしてほしい旨を説明する。また、トレーニング中は携帯電話を学校の先生に預けることと、このトレーニングに関する情報をSNSに挙げない約束をする。

5.2 G1セッション からだとところに気持ちを向ける (1日目 9:45~10:30)

5.2.1 目的

トレーニングを始めるにあたり、日常から非日常への第一歩を進める。身体を動かすことでからだところの緊張を和らげるとともに、深呼吸でリラックスにつなげる。リラックスした状態で自身の内面を体験し意識化してもらう。

5.2.2 用意するもの

マイク2~3本、ピンマイク、フェイスタオル、(ストップウォッチ)

5.2.3 進行

(1) 室内を歩きながら体に意識を向ける

自分の体の動かしづらいところや凝っているところなど、また、気持ちよいという感覚なども感じてもらう。

(2) ゆっくりと体を動かす

学生は初め前を向いて着席している。スタッフは掛け声と動きで学生を誘導する。

①首を動かす。

4カウントで首を前に曲げ、4カウントで元に戻す。

- 4カウントで首を後ろに反らし、4カウントで元に戻す。
 - 4カウントで顔を左に向け、4カウントで元に戻す。
 - 4カウントで顔を右に向け、4カウントで元に戻す。
 - 4カウントで首を左に曲げ、4カウントで元に戻す。
 - 4カウントで首を右に曲げ、4カウントで元に戻す。
 - 8カウントで首をひと回しする。
- ②両肩を動かす。
- 2カウントで両肩を上げ、2カウントで力を抜いて下ろす。
- 左右交互に両肩を回す。最初は小さく肩をあげ、4カウントで後ろに回す。次は、肩を前に入れる感じで、4カウントで前回しする。続いて、今の動きを大きくして、後ろ回し、前回しの順に行う。
- ③腕を体の前の方に伸ばし、2カウントで両手を握り、2カウントで両手を開く。
- 次は、片方の手を握り、もう一方の手を開く。2カウントごとに握る手と開く手を入れ替える。
- その次は、片方の手を握り、もう一方の手を開いたら、握った手を自分のからだの方に引っ張る。この時も2カウントごとに握る手と開く手を入れ替える。
- ④足を動かす。
- 踵は床から離さず、つま先の方を上げる。4カウントで上げ、4カウントで下ろす。
- 続いて、つま先は着いたままで、踵を上げる。4カウントで上げ、4カウントで下ろす。
- ⑤タオルを持って、ゆっくり立ち上がり、ピンと張って、腕を上上げる。身体をゆっくり上に引っ張り上げる感じで腕を伸ばす。伸びきったら少し力を抜いて緩める。(もう一度繰り返す。)
- タオルは引っ張ったまま、体を後ろに反らす。気持の良いところまで反らしたら、ゆっくりと戻す。(もう一度繰り返す。)
- そのまま、今度は右の脇腹をゆっくりと伸ばして戻し、左の脇腹をゆっくり伸ばして戻す。(もう一度繰り返す。)
- ⑥タオルを置いて深呼吸。口からふうっと息を吐いて、鼻からゆっくりと息を吸う。(もう一度繰り返す。) さらに2回深呼吸する。

(3) 着席して身体を感じを味わう

5.3 G2セッション 言語的コミュニケーションについて学ぶ (1日目 10:45~12:00)

5.3.1 目的

言語的コミュニケーションについて、講義とロールプレイを通じて体験的に学ぶ。Sセッションの導入となることを目指す。

5.3.2 用意するもの

椅子、パワーポイントによる表示の機器、ホワイトボード (必要ならば、ロールプレイの

位置について示す), ストップウォッチ

5.3.3 進行

(1) パワーポイントによる講義：『コミュニケーションについて』

人間関係トレーニングの基礎である。聞き方・伝え方についておさらいをする。聞き方・話し方のコツ, アサーションについて説明する。感受性に基づいた対話に導入する。

(2) スタッフによるデモンストレーション

例：悪い聞き方（「無関心」な態度, 「過干渉」な態度）と, 良い聞き方の2パターン。

(3) 学生によるロールプレイ1（傾聴体験, アサーション体験）

講義を踏まえて, 実際に聴く体験, お話する体験をする。3人でグループを作り, 3人の中で, 話す人・聴く人・観察する人を決める。話し手・聴き手・観察者は順番に役割を交代する。役割を回す順番を決める。

話すテーマは, 『この人間関係トレーニングに対する期待と不安』とする。目をつむって1分間, このテーマについて, 今, 話したいことを自分の中でまとめてもらう。

【教示】

話し手さんはうまく話そうとしなくて大丈夫です。自分の気持ちを正直に伝えてみましょう。聴き手さんは, まずは先程の講義でお話ししました, 傾聴, 目と耳と心で聴く聴き方ですね。聴くことに専念しましょう。話す人を見て, しっかりと話を聴いてください。観察者さんは, シャベりません, 黙って話し手さんと聴き手さんのやりとりを観察します。2分ぐらい経ちましたらお知らせします。用意はいいですか? それでは, 始めてください。

※役割を交替しながら, 各グループ3回実施する。

(4) 学生によるロールプレイ2（傾聴体験, アサーション体験）

次に, 『コミュニケーションについての自分のテーマ』について, 話を深めていく。

【教示】

皆さん, さきほどのターンで, 同じグループの人がどのように考えているか知ることができました。他の人も, 自分と同じような不安を持っているんだなと気づいたり, または, 全然, 考えていることが違うのだなと驚いたかもしれませんね。次に話し手になるときは, 先ほどと同じ話になるかもしれませんが, 他の人の考えを聴いて, 気が付いたこと, コミュニケーションについて, 自分にはどんなテーマがあるのかなと考えてみましょう。話をするときのポイントは「私は, こう思う, こうしたいと思っている」というように, 「私は」を主語にしてお話してみましょう。さっきの講義に出てきましたね。聴き手になるときは, 先ほどは聴くことに専念しましたが, 今度は, 話し手さんの話を明確にしてみましょう。「それは○○ということ?」などと尋ねてみるといいですね。話し手さんと聴き手さんの二人で, アサーティブなやりとりにチャレンジしてみましょう。観察者になるときは, 話し手・聴き手のやりとりをしっかりと観察してください。お話をして, やりとりをする時間は3

分ほど取ります。それでは、話し手で話したいことを考えます。今、気がついたこと、もう少し話したいことは何でしょう？ 目をつむって、1分、考えてみましょう。

※役割を交替しながら、各グループ3回実施する。

(5) まとめ

体験のまとめをして、グループを解散する。

5.4 G3セッション 中間振り返り (1日目 16:30~17:30)

5.4.1 目的

(1) 個々に取り組んできた体験の進み具合を振り返り、自分なりに整理することで後半に向けての課題を明確にする。

(2) ここまでの思いを言葉にして全員で共有することで、今後のSセッションの活性化につなげる。

(3) Sグループ間、及びクラス全体としての進捗状況を緩やかに、かつ自然に調整する。

5.4.2 進行

(1) クラス全体で集まり、円形に座る

※気になる学生がいたら、スタッフはその隣に座る。司会をするスタッフは、様子を見て、時計回りで進行させるか逆時計回りで進行させるかを判断する。

(2) 閉眼と沈黙

1分間、目をつぶって沈黙し、「心の中に今どんな思いがあるか」を見つめてもらう。

(3) 心の中の思いを話す

グループ名とフルネームを言ってから、一人20秒くらい話す。終わったら、静かに次の人にマイクを渡していく。スタッフも30秒程度で話す。

※学生20秒×36人+スタッフ20秒×5人

※学生一人一人の発言を聴いて、その場で何らかのメッセージを伝える必要があるとスタッフが感じた場合には、その学生の後に発言するスタッフがその任を担う。また、そのセッションの担当スタッフが最後のまとめのなかで取り扱うことも出来る。

【教示】

人間関係トレーニングも1日目が終わろうとしています。朝ここに集まり、オリエンテーションをし、その後からだや心の声に耳を傾けること、そして言葉でのコミュニケーションについて体験してきました。きっと心の中がとても敏感に動いていて、たくさんのことを感じたり、考えたりしているのではないのでしょうか。

このG3では、まずは、自分が今、何を感じているかを振り返ってもらいます。そして、

みなさんから一人20秒くらいで話してもらい、この全体グループで共有したいと思います。自分の心の中のことをていねいにつかみややすくするために、1分間目を閉じて、行います。合図をしたら、目を閉じていただくので、今は開けたまま聞いていてください。

1分間目をつぶっている間に、自分の心の中にどんな思いがあるか確認しましょう。ていねいに見ていくと、今、ことばにできること、できないこと、言えること、言えないことが混ざっているかもしれませんね。それらを自分で区別して、今、ここで話したいことを一つだけ選びましょう。もっと言いたいという事柄もあるでしょうが、同じような体験をしている誰かが自分の気持ちと重なることを言ってくれることもあります。ですから、自分なりのものをひとつ選んでください。

「意見や考え」のように頭で考えたものではなく、みなさん自身の今の心を表現してみましょう。まとまらなくてもいいし、かっこよく言わなくてもいいのです。意見、考えを言うのではなく、きれいにまとまらなくてもいいから「自分の今のところ」を表現してみましょう。たとえば、今の自分が感じていることは言葉で表すとこういう言葉で表現できるのかなどか、心の中がごちゃごちゃしているんだけど、この様な思いがあるのかなどか、うまくことばで表現できないけど、こういう感じとか、心にあるものを言葉で表現してみましょう。

では、自分の心の中で感じていることを掴むために、目を閉じてみましょう。1分間沈黙の時間をとりますので自分の心に、気持ちに耳をすませてください。

発言の機会は1人1回ですが、聴くチャンスはたくさん用意されています。

話を聴くときは、話している人に耳と心を傾けてよく聴いてください。このように聴いていくと、今後のセッションの中で自分は何を話したいのかということに気がつくかもしれません。

(4) まとめ

【教示】

今、皆さんの感じていること、ここまで取り組んできたことをお互いに知ることができましたね。ありがとうございました。

どうぞ、一人ひとりの心の中の思いや、気づきを大事にそっと包んだまま、また明日ここでお会いしましょう。外に逃がしてしまうのはもったいないですので、ぜひご自分で大事にしてください。

5.5 G4セッション 非言語コミュニケーション体験 (2日目 9:15~11:00)

5.5.1 目的

非言語コミュニケーションを体験する。言葉を交わさないコミュニケーションは非常に難しくもどかしい。日常、私達は言葉にいかにも助けられているか。セッションにおいて、「見る」「聴く」だけでなく、「感じる」「考える」「察する」という感受性を使う課題に取り組み、コミュニケーションの大切さを体験する。

言葉を使わない不自由さや限界を感じるだろうが、それでもなお非言語コミュニケーションでも確実に他者に伝わる、受け取ることができることを実感できると良い。

5.5.2 用意するもの

画用紙（四つ切画用紙2枚をテープで貼った物）、四つ切画用紙を入れる封筒、道具箱（ウエットティッシュ、ゴミ袋、毛糸、のり、セロテープ、両面テープ、カッターナイフを入れる）、新聞紙、折り紙、荷造りひも、油性マジック（5箱）、クレパス（5箱）、12色の色鉛筆（5箱）、布（はぎれ）、草花

※学生の人数分の椅子を横の壁に置いてもらう。

5.5.3 進行

(1) 2日目の導入

2日目の挨拶をし、途中の休憩について説明した後、学生にSセッションのグループごとに机に集まってもらう。昨日のプログラムを簡単に振り返る。

(2) 1つ目のワーク 「ぎゅ」回し

【教示】

これから行うG4セッションでは、言葉を使わずにコミュニケーションする体験をします。これから少し練習をしてコツをつかみます。手をつなぐワークなのですが、皆さん、講堂へ入る前に手指消毒はされていますか？

※全体の様子を見る。消毒がまだな人がいたら机の上のアルコールで消毒をしてもらう。

① それでは、練習の説明をします。机の近くで真ん中を向く形で円を作って下さい。そのまま前を見ます。口を開いたり、目で合図をするようなアイコンタクトをしないで、意識を空中に集中させて下さい。

② はい、それでは、隣の人と両手をつないで下さい。隣の人の手を「ぎゅっと握る」という動きを回して行く、つなげて行くというのをやってみましょう。スタッフから肩を叩かれた人は右手で隣の人の手を握って、握られた人は、次の人に渡すまでの感覚を大事にしながらゆっくり、今度は右手で右隣の人の手を握って下さい。こんな感じでゆっくり（とサブのスタッフに見本を見せてもらう）体を回っていくような感じですね。それをつなげていきます。ひとまずやってみましょう。一周したらストップして下さい。

③（様子を見て終わったようなら）どうでしょう、できましたか。よくわからなかったグループがあったら教えて下さい。

※できなかったグループがある場合、もう一度やる。セッション担当者は全体を見回して理解できたかよく確認する。

④ 思わず前の人や横の人を見たり、笑ってしまったり、手がずっと動いたりしていた方もいたと思います。沈黙で能動的に動くのはとても難しいのです。授業に出ている時、実習で説明を聞いている時、黙っていることはできるでしょう。それは、頭は動かしているけれど、受動的な行動だからです。沈黙して能動的に振る舞うことはとても難しいのです。

⑤ それではもう一度やってみましょう。ちょっとスピードが速いグループが多かったですかね。少し前を見てもらえますか。（担当者がゆっくり握る仕草をして見せる。）

はい、次はこんな感じでゆっくりと回して下さい。さっき始めた人は？（手を挙げてもらう）その人の右側の人からスタートです。いいですか、今度は目をつぶります。そしてまた隣の人と手をつなぎます。「ぎゅっ」を送り、つなげていきましょう。それでは呼吸を整えて、静かに沈黙します。集中しましょう。練習のように一周で終わるのではなく、私が終わりと言うまで「ぎゅっ」を回し続けて下さい。それでは始めて下さい。

※1分程続ける。静けさや集中の程度を見て終了とする。

(3) 2つ目のワーク 非言語表現

【教示】

はい、お疲れ様でした。どうでしたか。黙って合図を送ること実感できましたか。それではここから、言葉を使わずにコミュニケーションを体験するワークを行います。皆さん、机の周りに集まって下さい。これから皆さんに道具を配ります。

※他のスタッフは、道具箱、画用紙、新聞紙を配布する。

①まず新聞紙を敷いてその上に画用紙を置いて下さい。作業で机が汚れないように新聞紙は広く敷いて下さい。（それぞれ広がったら）はい、そうです。

②これから行うことを説明しますね。このセッションでは、色紙や毛糸などを使って、皆さんに何かを表現してもらいます。色紙をどんな形にちぎっても、何色を使っても、どんな場所からどんなふうにも貼っても構いません。また、毛糸はあらかじめ切っておきましたが、必要に応じて加工して頂いて構いません。また、講堂の後ろの机の上にはクレヨンやマジック、ひもや布、葉っぱなどが色々ありますので、それも使って頂いて構いません。ウエットティッシュは手を拭くのに使って下さい。ビニールの袋はゴミ袋です。無理にたくさん貼る必要はありません。特に決まったやり方、正しいやり方があるわけでもないので、自由にやって下さい。ただし、ルールが一つだけあります。今練習したことですが、一言も言葉を交わしてはいけません、会話をしない。あーとか、そうとか、声に出さない。口をパクパクさせない。この作業は沈黙して行います。そして目で合図、アイコンタクトもしないで下さい。また身振り、手振りもだめです。もちろん筆談も。これは心を使うワークです、心で相手の気持ちにくみ取り、作品を作っていきます。時間は30分程度です。終了5分前になりましたら、私から合図を出します。何か質問はありますか？

③それでは、皆さん、始める前に一度目をつぶりましょう。目を閉じます。そうです。ここから沈黙に入ります。ルールを思い出して下さいね。はい、目を開けて。どうぞ、始めて下さい。

※25分経過した頃に、「あと5分です」と伝え、30分経過したら終了の合図をする。

④はい、終了です。もう声を出してもらっても構いません。声を出せないってなかなか大変なものですね。お疲れ様でした。言葉を交わさなくて、アイコンタクト、身振り手振りも使わないで、心を使ってみんなと一緒に作業をすること、皆さんいかがでしたか。それでは7分程トイレ休憩を取ります。

(4) 2つ目のワークについての話し合い

【教示】

- ① それでは、ここから5～6分時間を取りますので、グループの皆さんで、今この沈黙の作業の時間はどんな体験だったか、思ったこと感じたことを話し合ってください。作業をする中で、一人一人が心の中で色んなことを思ったり感じたりしたと思います。後で、グループごとで話を聞かせてもらいますので、あらかじめグループの中から話す人を決めておいて下さい。

※他のスタッフはグループを回って話し合いの様子を把握する。進みが悪いようなら、ちょっと促進することもある。

- ② はい、話し合いを終わって下さい。それでは、これからそれぞれのグループの作品を見せてもらいます。今の振り返りで、どんな話が出たのか聴いていきたいと思います。

※担当スタッフが最初に発表するグループを決める。

- ③ では作品を持って全員で前に出て来て下さい。他の皆さんは作品が見える位置に移動して下さい。

※移動が終わって落ち着くまで見守る。

(5) グループごとの発表と質疑

【教示（終了時）】

はい、全グループの体験、皆さんからの感想、質問を聞かせてもらいました。まだ言い足りない、もっとこうすればよかったとか、あるかもしれませんが、それも人と人との関係、コミュニケーションです。

この時間は、短時間ではありましたが、皆さんで色んな表現をしました。ルールがある中で、皆さんは自分の心を使い、そしてみんなと心を合わせましたね。みんなの共同作品ができました。言葉ではなく、非言語でも伝えあえる体験ができたのではないかと思います。それでは、元の場所に戻りましょう。

(6) 各グループでの作品の収め作業と後片付け

5.6 G5セッション 最終振り返り (13:45～15:15)

5.6.1 目的

日常の中での非日常の体験を可能な限り言語的にまとめ、体験を心に収めることを目的とする。また、5つのスモールグループに分かれてトレーニングを受けた学生を、一つのクラスに戻す意味もある。G3に続く全員での言語的セッションである。円形に座り、一人ずつ発言し、お互いそれを聴くという形で2日間のトレーニングを締めくくる。

また、マスクで聞き取りにくい状況下で、聴き手に伝わっているか気使い配慮することの必要性に話し手が気づくことも目的とする。

5.6.2 進行

(1) クラス全体で集まり円形を描くように椅子に座る

【教示】

昨日は、身体をゆっくりと動かして、リラックスしたり普段気づかない体の調子に気づいたりしましたね。続いて、コミュニケーションの講義とロールプレイをしましたね。今日は、言語を使わないコミュニケーションを体験しました。同時に、5つのグループに分かれて、実際に関係性のなかでの対話を体験しましたね。……本当にいろいろなことをしました。

さまざまな思いはあるでしょうが、今言いたいこと、聞いてほしいこと、心にあることを整理する。言えることと、言えないことを分ける。言えることの中から一つを選んで発言する。昨日のG3と一緒にですね。さらに他者の発言を聞いて言いたくなったことがあれば、付け加えてもいいでしょうね。

この時間は、一人40秒くらいで発言します。他の人が話している時にはよく聴く。これも練習しましたね。

今日は、さらに、話し手としても工夫をしたいと思います。マスクという遮蔽物があるので、話す人は、聴く人の心にちゃんと自分の話（思い）を届けるよう、あるいは届いているかということに思いを馳せてください。昨日も、なかなか聞き取ることが難しいと感じていました。ゆっくり、はっきり、滑舌をよくして……届いていないと感じたら、もう一度言ってみるなど、気遣いをしてみましょう。

(2) 閉眼、そして心を見つめる（1分）

(3) 心の中の思いを話す

グループ名とフルネームを言ってから、一人40秒くらい話す。

(4) まとめ

【教示】

①いつもと違う体験をしたと言う話がたくさん聞かれました。学校という日常の場で非日常を、41人で頑張って作り上げる体験ができた。このことから、何も成果のない人はいないということが言えますね。

②具体的な課題がない状況に、最初は戸惑っていたようですが、よく挑戦したと思います。自分はどうしたいのかとか、あるいは他者の発言に対しても、どんな言葉を返してあげたいのかということに気づいた人が多くいたように感じています。自分の心の動きを捉えたり、心の声に耳を傾けたりということをしていねいに試みたと思います。頑張りましたね。
※心の仕事を成し遂げたことへの肯定的評価

③自分は皆のように成し遂げることがないように思うという人は、がっかりする必要はありません。変化に気づくことに時間がかかる人もいます。焦らず、今回の体験をそのまま心の戸棚に大切に保管しておいてください。そして、時々思い出してみてください。心はいつも動いていて、変化しています。簡単にまとめられないこと、あるいは簡単にまとめて

はいけないこともありますね。時が来るまで、そのまま大切に抱えていてください。

※苦しい、辛い、わからなくなったなど、挫折体験への配慮

※いろいろな段階、状況で個々人の訓練が終わっていることを説明して、今の体験が変化するものであることを伝える。

(5) ケアレスミスに関する注意と、ゆっくりと元に戻っていくことの説明

(6) 振り返り用紙の配布とポストへの提出を指示

(7) 終わりの挨拶

(8) 振り返り用紙記入（書き終わった人から静かに退室）

6. 考察

6.1 2022年度のトレーニングプログラムに対する評価

前述した通り、A看護学校における人間関係トレーニングの目標は、終始一貫して、自分自身に気づき、他者との関係性の中で自分を捉え、他者との関係のなかで自分らしく行動できるということであった。

この目標を達成するためには、割ける時間が少なくなったとしても、ベーシックエンカウンターに近い体験をする機会をプログラムに組み込むことは必須であった。

トレーニングが在学中に2回行われていた時期から、1回の実施へと変更された時のプログラムの改変が、最も困難でチャレンジablであったと記憶している。トレーニングが2回行われていた時は、1年生では、多少の気づきはもちろんあるが、楽しい体験と感じてもらうことが重要な目標だった。3年生のトレーニングでベーシックエンカウンターをかなりしっかり行っていたので、そこに無用な警戒心をもたずに向かえるよう、1年生のトレーニング内容を設定していたのである。

在学中に1回のトレーニングに変わってからは、学生たちは凝集された体験をすることとなった。トレーニングが実を結ぶよう様々な工夫が施されたが、なかでもスモールグループでのベーシックエンカウンター体験を促進するために技法導入が検討され、そのための準備が整えられた。使わないかもしれないけれども準備は必要という準備品が増えた感がある。それでも、A校の先生方がすべてを整えてくださったので、安心してトレーニングに向かうことができた。実際に、何らかの促進がどうしても必要になるグループは、毎年のように発生しており、対応する上でさまざまな準備に助けられている。

今回のコロナ禍への対応においても、上記のプログラム変更は大変参考になった。さらなる日程の縮小に加え、合宿形式ではない学校での実施という制約に直面したが、コミュニケーションにやや特化したエクササイズを配置して、学生の意識をコミュニケーションに焦点づけ、そこからスモールグループでの体験に導入したことで、トレーニングの効果を高める

ことができた。これに関しては、2019年と同じスタッフで実施できたことも大きい。各スタッフが構造の変化を冷静に分析して対応したことが、今回のトレーニングを下支えしていたと考えている。

6.2 看護学校の教員と外部スタッフの協力関係

A看護学校では、長期間にわたって、先生方と外部スタッフが協同して人間関係トレーニングを実施してきた。これによって培われた相互協力と信頼の関係が、今回のプログラム改変でも大きな力を発揮したと考えている。

トレーニングプログラムの構成は外部スタッフが話し合って決定しているが、実際のトレーニングにおいて、それぞれのセッションの内容に合わせて様々な準備を整えてくださるのはA校の先生方である。特に、Gセッションにおいては、プログラムに応じて、講堂の全面にブルーシートを敷いたり、担当スタッフの指示に従って机や椅子の配置を細かく調整したりする。2日間の日程で、これだけのプログラムをこなしていけるのは、このようなサポートが惜しみなく与えられているからであり、トレーニングの効果的な実施において非常に重要な点である。

6.3 学生たちがトレーニングで得たもの

学生たちは、人間関係トレーニングが日々の看護教育の学び方と異なることに戸惑いながらも、何かを得ようと真剣である。ベーシックエンカウンターでは、実習での話し合いのように明確なテーマが存在するわけではない。多くの学生は、このことに気づくと驚き、そして困難を感じる。そして、このような、与えられたテーマのない、それぞれの存在と存在で関わるしかない状況に徐々に慣れ、果敢に取り組みを始める。生身で関われば傷つけあってしまうかもしれないという恐れを抱きながらも、仲間を信頼してやってみるという変化が現れる。ファシリテーターとして確かな手ごたえを感じる場面である。

2日間のトレーニングになってからは、縮小版になった感は否めないものの、それでも、いつもと違う状況での自分の感じ方や振舞い方に気づき、同時に仲間たちが戸惑いを収めていく姿にも関心を払っている様子が見られた。そのような変化とともに、テーマを介さなくても対話が生まれる体験をするのである。テーマを介さない対話では、ある意味、生身の自分が引き出されやすいが、それを表現できる自分自身への信頼感や、受け止めてもらえるだろうという他者への信頼感が、芽を出して育ち始めたことが観察された。

学生たちが書いた振り返りでも、真剣に話を聞いてくれた仲間への感謝、看護師を志望した動機の再確認と将来への決意、相互に支えあう関係の大事さへの気づき等の言葉がたくさん記されていた。短いトレーニングではあったが、その後の人生に必要な能力の萌芽を確かに手に入れていたと確認できた。

6.4 非日常体験設定の困難化

A看護学校が人間関係トレーニングを開始した頃は、訓練の場を旅館に設定するだけでも、非日常体験の環境を作ることが可能だった。田舎の旅館は、都会の日常世界から遠く離

れていたからである。だが、通信技術がどんどん発達していくなかで、たとえ旅館に留め置かれても外部の情報を遮断することは難しくなった。携帯電話が普及してからは、携帯電話を手放すこと自体に強い不安を感じる学生たちが増えた。看護学生たちもまた、一般の若者同様、目の前にいる人と繋がるよりもSNSを通して他者と繋がることを好むのかもしれない。

しかし、逆説的ではあるが、携帯電話を8時間程度手放してみることは、学生たちに、目の前のクラスメートと空いた時間を共有する体験をもたらすことになった。その時間はクラスメートと語りあえるという想像以上に豊かなものだった。どこにいても情報が瞬時に入ってくる状況に身を晒している世代の方が、情報の奔流から解き放たれる体験に敏感だということは、ある意味当然とも思える。

しかし、情報発信は携帯電話を返してもらってからでも行えるので、やはり非日常の体験をSNSに上げないというルールは徹底しなければならない。そう考えると、非日常の設定およびそこでの体験を守ることは容易でないことが分かる。隔離された安全な非日常の場が確保しにくくなったことで、ベーシックエンカウンターの枠組みを守ることは相当難しくなっていると言えよう。

6.5 看護学生にとっての人間関係トレーニングの意味

看護師の仕事は、チームで対応する性質を持っており、看護師同士であっても的確な申し送りが必須である。さらに他の職種ともたくさんの連携をしなければならない。そのような中で、患者と最も長く接触する職種であり、患者の理解という点でイニシアティブをとることが期待されているのが看護師であろう。

実際に、患者と接する時、他の職種よりもたくさんの気持ちを患者から投げ込まれる立場であると考えられる。患者は不安も大きく、普段のその人よりはるかにセンシティブになっていることから、最も長く接する看護師に神経質な側面を見せることは普通のことであろう。看護師は、このような情緒的に揺さぶられる関係性のなかで、自分の情緒にも気づきながら、患者の心の動きを理解し対応する力を求められるのである。

このような場面に対応できる力は一朝一夕に身に付くものではない。普段の学びに加えて、集中的な人間関係トレーニングを体験することは貴重な成長の機会になるのである。

6.6 看護教育カリキュラムと人間関係トレーニング

看護師養成のカリキュラムの改正に伴って、看護学生に対する人間関係トレーニングが行いにくくなってきた状況については、第3章で簡単に触れた。現在の看護教育のカリキュラムでは、人間関係トレーニングを行うことが明確な形では求められていないので、多大な人手と時間を要する人間関係トレーニングは、カリキュラムの拡大に押されて教育現場からフェードアウトしつつあるように感じられる。

直近のカリキュラム改正に関して言えば、厚労省の「看護基礎教育検討会報告書」(2019)では、教育の基本的考え方の改正点のひとつを「対象との人間関係を形成するためには、その基礎となるコミュニケーション能力が求められ、更なる強化の必要性があることから、コ

コミュニケーション能力獲得を目指す旨を明記した」としている。この論点自体には異論はないが、ここでいう「コミュニケーション能力」とは何を指しているのだろうか。

もし、単なるコミュニケーションスキルに重きを置いているのなら、甚だ疑問だと言わざるを得ない。本来のコミュニケーション能力は、自分自身に対しても、他者に対しても、しっかりとした感受性に基づいた受容や理解が基本になっていなければならない。看護教育が、効率性やスピードを重視する今の社会の流れに押されて、スキルに特化した偏った人材育成に陥らないことを強く願っている。

【引用文献】

- 原田慶子・岩崎朗子：エンカウンター・グループが看護学生の自己理解に影響をおよぼす要因，長野県看護大学紀要，vol. 9: p. 29-35, 2007.
- 葉山大地：看護学生を対象としたグループワークを取り入れた授業の実践報告，中央学院大学人間・自然論叢，p. 62-86, 2015.
- 厚労省：看護基礎教育検討会報告書，p. 10, 2019.
- 滝沢弘忠：エンカウンター・グループ，日本保健医療行動科学会年報，vol. 12: p. 75-82, 1997.
- 田中弘子・諸橋孝・藤田悠紀子：体験学習としての感受性訓練，新潟大学教育学部長岡分校研究紀要，26集：p. 17-26, 1980.
- 田中弘子・青木義子・広瀬黎子・浅海敬子・寺沢英理子：看護専門学校生の集中的グループ体験における構造的エクセサイズの考察，新潟青陵大学大学院臨床心理学研究，vol. 1: p. 39-45, 2007.
- 矢吹明子：看護学生にとってグループ体験授業をすることの意義と効果，京都市立看護短期大学紀要，vol. 30: p. 1-40, 2005.